



八王子市立たがの杜小中学校

校長 北川 大樹

「令和7年度 八王子市立たがの杜小中学校 学校経営計画」を再掲した上で、各項目についての学校評価結果を踏まえた令和7年度のめざす学校、中期的目標と方策、今年度の取組目標と方策についての自己評価、次年度以降の課題と対応策について記載する形式で報告する。

I めざす学校

「地域とともにある学校」という八王子市立学校の理念の下、学校運営協議会の目標「地域社会・家庭・学校を繋ぎ、支え合う協働体制を構築し、健やかな子どもを育てる」を踏まえ、めざす学校像として「地域で、地域と共に学ぶことのできる多賀の学び舎」を掲げる。

本校に関わるすべての人の安全と人権が守られ、居場所と活躍の機会があることを基盤とし、具体的な学校像を設定する。

- ① 確かな学力を身に付けさせる学校
- ② 一人ひとりの良さが伸ばされ、活かされる学校
- ③ 信頼関係のある温かい学校
- ④ 地域社会と協働する学校

(1) 教育目標 「知性」「公正」「貢献」

日本国憲法・教育基本法の理念、学習指導要領の趣旨及び八王子市教育委員会教育目標を踏まえ、共生社会の担い手・持続可能な社会の創り手として、知性、感性に富み、健康な精神とたくましい身体を養い、心豊かな人間を育成するため、次の目標を設定する。

【知性】自ら学び考える人

【公正】思いやりがあり、責任ある行動のできる人

【貢献】心身ともに健康で社会に役立つ人

(2) めざす教師像 「高度専門職として学び続け、社会人として範となる教師」

地域社会の「知」のセンター的機能を発揮する使命を果たすため、象徴的存在である教師像を設定する。

- ① 人権尊重の理念を理解し、深い愛情を注ぐ教師
- ② 組織の一員として協働し、職務を遂行する教師
- ③ 真摯に研究と修養に励み、教育観を磨く教師
- ④ 熱意と使命感をもち、信頼される教師

自己評価

【二小】

教職員による自己評価の肯定的回答は100%となった、この結果は教師一人ひとりが高度専門職としての自覚をもって日々の教育活動に取り組んでいることを示している。しかし、めざす学校像の各項目の児童及び保護者・地域の肯定的回答と認識の差が生じている項目もある。

学校ホームページ等を活用し、学校の教育活動を発信するとともに、教師が児童の実態や保護者・地域の声を正確に把握し、より効果的な指導・支援につなげられるよう、校内OJTや小中合同での研修会等の研修機会の充実を図り、教師一人ひとりのスキルアップを推進し、乖離の解消につなげていくことが必要である。

【四中】

教職員による自己評価の肯定的回答は96%となった。内訳に着目すると、「だいたいあてはまる」が47%～57%である。「どちらとも言えない」という選択肢があった場合、結果が変化すると想定される。

引き続き、教師一人ひとりが、高度専門職として、学び続けることのできる機会をつかむことができる環境を整備する必要がある。

学校関係者評価

【二小】

児童と真摯に向き合い、責任感と使命感をもって全力で対応に取り組む教職員の姿には、いつも感心させられている。若手の教員が多い中で、「一人で抱え込まず、組織として対応する」という意識が高く、適切な情報共有のもとで指導が行われていると感じている。

小中一貫校となった今年度は、中学校との連携を深める大きな転換期となった。義務教育9年間を見通したより効果的な教育活動の充実に向け、今年度実施した研究発表の内容をさらに洗練させながら、今後も地域の子どもたちを育ててほしい。日頃の先生方の頑張りに感謝の思いをもつとともに、地域としても子どもたちの成長のために協力していきたい。

【四中】

本校は大きな転換期、移行期を迎え教職員の皆さんが熱意と使命感とをもって奮闘されている姿に敬意を表したい。「組織の一員として協働し、職務を遂行する教師」の「あてはまる率」が低いのがいささか気になるころではあるが「だいたいあてはまる」を加えれば他の項目と大差なくなるので特に問題になることはないであろう。

なお、先日の小中一貫教育研究発表会を拝見して先生方のこれまでの努力を身近に感じることができた。その努力、精進に対して深い敬意を伝えるとともに感謝の言葉を贈りたいと思う。ありがとうございました。

2 中期的目標と方策

(1) 「知性」

肯定的回答	児童・生徒	教職員
二小	88.5%	93.7%
四中	90.4%	94.0%

ア 中期的目標

基礎的・基本的な知識及び技能の習得、思考力、判断力、表現力等の向上により、主体的に学ぶ態度を育成する。

イ 方策

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
- ② 児童・生徒一人ひとりの学習定着状況の正確な把握と適切な指導・支援
- ③ 児童・生徒一人ひとりの問題解決的な学習の充実を図るための授業展開・組み立ての工夫・改善
- ④ 論理的思考力、批判的思考力の向上に向けたプレゼンテーション等表現活動の充実
- ⑤ 読書センター、情報センター、学習センターとしての 学校図書館の機能の整備と活用
- ⑥ 「八王子市版 GIGA スクール」の定着による ICT 活用技能の向上
- ⑦ 必要に応じた補充学習の実施

自己評価

【二小】

学校教育目標「知性」に関する肯定的回答は、62.8%から100%までのばらつきが見られた。教職員の「児童一人ひとりの学習定着状況の正確な把握と適切な指導・支援」が96%と高い値であるのに対して、児童の「教え方はわかりやすい」が86.1%と認識に差が生じている。引き続き、学力向上プロジェクトチームによる学習定着度状況の把握と適切な指導に向けた、校内外の研修等による研修機会の充実を図り、教師一人ひとりの高度専門職としての授業力向上を図っていく。同様に教職員の「『八王子市版 GIGA スクール』の定着による ICT 活用技能の向上」が96%に対して、児童の「必要に応じて1人1台の学習用端末などの ICT 機器を活用した授業を行っている」が79.1%と、こちらも大きな認識の差がある。ICTの利用を目的とするのではなく、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現をめざした ICT の効果的な活用を視点に、教職員の ICT 活用指導力の向上に向け、引き続き、あらゆる機会を通じて授業改善及び授業力向上を図っていく。なお、義務教育修了段階で全児童・生徒に身に付けさせる社会生活を営む上で必要最低限の知識・技能の習得を確認するための「はちおうじっ子ミニマム」については、20点満点の17点以上の児童、第2回で第1回よりも得点が向上した児童を合わせた結果、国語で86.3%、算数で92.2%だった。

【四中】

学校教育目標「知性」に関する肯定的回答は、59.5%から100%までのばらつきが見られた。「教え方はわかりやすい」の96.0%は、昨年度の74.4%から大きく上昇した。引き続き校内外の研修等をはじめあらゆる機会を通じて、教師一人ひとりの高度専門職としての授業力向上を図っていく。しかしながら、59.5%となった「授業中、すすんで自分の考えを発表している」、64.5%となった「予習や復習を心がけている」については、授業改善の視点として捉える必要がある。具体的には、すすんで考えを発表して学習を深める授業になっているのか？予習や復習をしたい、することでもって学習が深まる等の実感をもてる授業になっているのか？等の視点で振り返り、引き続き、あらゆる機会を通じて授業改善を図っていく。なお、義務教育修了段階で全生徒に身に付けさせる社会生活を営む上で必要最低限の知識・技能の習得を確認するための「はちおうじっ子ミニマム」については、20点満点の18点以上の生徒、第2回で第1回よりも得点が向上した生徒を合わせた結果、国語で88.7%、算数で95.6%だった。

学校関係者評価

【二小】

全体的には肯定的な回答が多く、満足できる結果であると言える。しかし、「ICTを活用した授業」「協働的な学び」については、9割に満たない結果となっていることから、より改善に向けた検討が必要だと感じる。義務教育修了段階で全児童・生徒に身に付けさせる社会生活を営む上で必要最低限の知識・技能の習得に向けて、児童一人ひとりの課題を把握し、問題解決的な学習の充実を図るための授業展開・組み立ての工夫・改善に努めることが必要ではないか。さらに、小中一貫校として、中学校との円滑な接続を実現するためには、義務教育9年間の初期段階である小学校段階で、学習意欲や学習習慣を養うことは非常に重要である。児童の主体性を大切にしたい授業づくりを通して、児童一人ひとりが自己肯定感や自己有用感を高めていくことが必要である。

【四中】

全体的に見た時、大幅に改善された項目もあり、満足のゆく結果であると言える。ただし、生徒の「授業中進んで自分の意見を発表している」、「予習や復習を心がけている」の数値が他の項目と比較して低い数値となっているのは注視する必要がある。ICTの活用（運用）については昨年度の78.8%に比べ81.9%と改善されてはいるがまだ十分でないのではないかと。それとは相反するが、漢字等は紙に書いても良いのではないかと。また、「読書センター、情報センター、学習センターとしての学校図書館の整備と活用」の項目については73.7%と比較的低い数値となっている。新校舎の整備にあたり学校図書館の整備・拡充に向けて生徒・教職員へアンケートを取ることも必要なのではないかと。

(2) 「公正」

肯定的回答	児童・生徒	保護者	教職員
二小	90.7%	90.2%	96.5%
四中	90.4%	85.9%	94.7%

ア 中期的目標

自他を尊重しながら粘り強く他者と協働し、人権感覚を洗練する。

イ 方策

- ① 人権教育の推進を通して、自他を尊重し、いじめを許さない思いやりのある態度の育成
- ② 明るく爽やかな挨拶を交わし合う教育環境の整備
- ③ 「認め、励まし、褒め、支える」指導・支援、自尊感情や自己肯定感、自己有用感、信頼関係の構築
- ④ 誰一人取り残さない特別支援教育の充実による「共生社会の担い手」の育成
- ⑤ 考え議論する道徳授業の展開と充実
- ⑥ 自主的・実践的な集団活動の充実により、主体性や忍耐力の育成、達成感や成就感の感得
- ⑦ いじめを許さない学校組織と学校いじめ対策委員会の機能発揮
- ⑧ 一人ひとりの多様なニーズに応じた登校支援の充実

自己評価

【二小】

学校教育目標「公正」に関する肯定的回答は、児童は約90%、保護者は約91%、教職員で約97%だった。教職員の「自尊感情や自己肯定感、自己有用感、信頼関係の構築」が100%に対して、児童の「自分自身は大切な存在である」が約85%となっている結果については、原因を明らかにした上で、自尊感情や自己肯定感、自己有用感の向上に向けた具体的な手だてを講じる必要がある。いじめに関する設問については、「いじめを許さない学校づくりへの取組」が児童で約94%、教職員で100%と高い中、保護者、地域が約86%と低くなっていることから、学校の取組を校外へ発信する必要がある。本校のいじめの認知件数は182件であり、うち、126件解消した。この結果について、本校は教職員がいじめ問題に関する基本的認識をもって、未然防止、早期発見、早期対応に適切に取り組んでいると自己評価している。

【四中】

学校教育目標「公正」に関する肯定的回答は、生徒は約90%、保護者は約86%、教職員で約95%だった。「明るく爽やかな挨拶を交し合う教育環境の整備」については、「あまりあてはまらない」が約16%であり、原因を明らかにした上で、具体的な手だてを講じる必要がある。いじめに関する設問については、「いじめを許さない学校づくりへの取組」が生徒で約92%と昨年度の約87%から上昇した。保護者、地域で「わからない」の回答が少なくないことから、学校の取組を校外へ発信する必要がある。本校のいじめの認知件数は、令和6年度の23件が令和7年度に

9件であり、令和6年度の継続7件のうち、6件解消した。この結果について、本校は教職員のいじめに対する感度がより一層高まり、未然防止へ向けた取組が効果的であったと自己評価している。

学校関係者評価

【二小】

「生活指導への適切な取組」への肯定的な回答が保護者・地域ともに9割を超えていることは、非常に素晴らしい結果である。いじめ問題についても、学校の取組が多く保護者に周知されており、保護者と連携した「いじめ対応」が実現できる環境が整っていると考える。さらなるいじめ対策に向け、児童の「自分自身は大切な存在である」や「いじめは、どんな理由があってもいけないと思う」の項目が9割を越えられるよう、引き続き、いじめ防止の取組の充実を図る必要がある。

【四中】

「生活指導への適切な取組」が生徒・地域ともに、また、生徒回答の「困っている人を助ける」がいずれも高ポイントなのは素晴らしいことである。また、生徒の回答の中で「自分自身は大切な存在である」が昨年度の76.3%から84.7%へと改善「自分には良いところがあると思う」が90.7%と昨年度の77.2%から大幅に改善されているのも評価すべきである。また、教職員のいじめ対策や登校支援の評価が高いことから先生方の自信が感じられる。

(3) 「貢献」

肯定的回答	児童・生徒	保護者	教職員
二小	84.2%	92.5%	96.0%
四中	78.1%	94.6%	98.0%

ア 中期的目標

持続可能な社会の実現に向け、自らの力を活かそうとする態度、社会参画意識と勤労観・職業観を醸成する。

イ 方策

- ① 義務教育9年間を見通し、地域に根ざし切れ目なくつなぐ系統的・継続的な教育活動
- ② 地域運営学校として、地域と協働した教育活動の開発
- ③ 地域社会・家庭と教育活動のねらい等の共通理解
- ④ 多様な教育力の活用とキャリア教育の充実
- ⑤ 「地域で・地域と共に・地域を学ぶ」系統性のある郷土学習
- ⑥ 危機回避能力の向上と自分の身は自分で守るための防災教育の充実
- ⑦ 食育の充実と生活習慣の定着
- ⑧ 地域と共に学ぶ機会としての保幼小連携の充実、地域ボランティア活動等の機会提供
- ⑨ 学校評価における地域・保護者との対話を通じた学校運営の改善

自己評価

【二小】

学校教育目標「貢献」に関する教職員の肯定的回答は96%となった。例年実施している「学校・地域合同防災訓練」に加え、地域美化活動への参加、地域人材と連携した学習活動の充実により、地域への愛情を深め、地域に関わろうとする思いを醸成する取組を推進した結果が表れている。一方で、児童の「地域や社会をよくするために何かをしてみたいと思う」が約77%と低い結果になっていることから、取組の充実と児童の実態との乖離が課題である。取組内容を精査し、より地域への愛情を育める取組を実施するとともに、学校が実施している教育活動の目的等をより正確に児童や保護者に伝える必要がある。

児童の肯定的回答が75%となった「将来の夢や希望をもっている」については、自己を見つめ、自身の将来を考える機会の充実に向け、キャリア教育を推進する必要がある。具体的には、小中一貫校の強みを活かし、小中合同での取組を充実させ、上学年から学べる機会を多く設定するなど、効果的な教育活動を推進していく。

【四中】

学校教育目標「貢献」に関する教職員の肯定的回答は98%となった。内訳に着目すると、各設問「だいたいあてはまる」が42～68%である。昨年度に引き続き、校内のみならず、小学校、地域行事等におけるボランティア活動等を広く募集・展開している。肯定的回答の割合は、教職員、保護者、生徒の順で下がる傾向にあり、学校が実施している教育活動の目的等をより正確に生徒や保護者に伝える必要がある。生徒の肯定的回答が46.4%となった「将来の夢や希望をもっている」については、設問における「将来の夢、希望」を大きく捉えて過ぎている可能性がある。参考として、市が実施している同様のアンケート調査では「こんなことができるようになりたい、という目標（現在の夢）をもっている」となっている。

学校関係者評価

【二小】

児童の「地域や社会をよくするために何かをしてみたいと思う」「今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいる」が低い数値となっている。これは、地域行事には積極的に参加しているが、地域への思いや自身の目標を設定して取り組む児童が少ないことが影響していると考えられる。地域への貢献という視点は、小学校段階では難しいことから、まずは地域への愛情を高め、自身の役割を考えるきっかけをつくるために、多くの地域と連携した活動を実施し、「地域にふれ、地域を知る」ことを重視した取組の推進を図る必要があるのではないかと考える。

【四中】

生徒の回答率を見ると「人の役に立つ人間になりたい」94.5%と高ポイントなのは素晴らしいことである。地域としても地域行事に接する機会を作り生徒が参加しやすい環境を作ることが必要である。ただ、「将来の夢や希望を持っている」の回答が昨年60.7%だったのに、今年は4

6. 4%と低下している。進路や職業について生徒自身が考えられるような対策を講じる必要もあるのではないか。

3 今年度の取組目標と方策

(1) 教育活動の目標と方策

① 「知性」

【2(1)イ①】

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」

校内外を問わず、教師一人ひとりの課題に即した授業公開・授業研究に取り組み、年間を通して相互啓発のある授業改善に取り組む。

【2(1)イ②】

「児童・生徒一人ひとりの学習定着状況の正確な把握と適切な指導・支援」

「はちおうじっ子ミニマム」及び各種学力等調査の結果を正確に把握した上で、つまずきの原因と解消の手だてを踏まえて個別に繰り返し指導・支援し、義務教育修了段階までに社会生活を営むための最低限の知識・技能を身に付けさせる。

【2(1)イ③】

「児童・生徒一人ひとりの問題解決的な学習の充実を図るための授業展開・組み立ての工夫・改善」

「何ができるようになるか」という目標、「何を学ぶのか」という内容、「どのように学ぶのか」という方法を明確にした上で、単元や題材、内容のまとまりを見通して、問いの形で示す「問題」を「解決」する授業を展開する問題解決的な学習の充実を図る。

【2(1)イ⑤】

「論理的思考力、批判的思考力の向上に向けたプレゼンテーション等表現活動の充実」

単元や題材、内容のまとまりを見通して、言語のみならず音楽、作品、身体表現を含む表現活動を位置付ける。思考を伴う表現活動を意図的に設定することで、理由や背景、関係性を追究する「なぜ」を重視した授業を展開し、見た目や思い込みに惑わされず「真実」を求める態度を育成する。ただし、表現活動の設定に当たっては、児童・生徒の発達や特性等を十分に踏まえることとする。

【2(1)イ①】

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」

教職員による自己評価の肯定的回答は100%だった。ただし、だいたいあてはまると回答した結果は、二小で60%、四中で31.6%だった。学校全体として授業改善等をテーマにした研究・研修には取り組んでいないため、一人ひとりに任せているのが現状である。

引き続き、教員が校内外で日常的に相互に学び合うことのできる環境整備を進めたい。今後に向けた具体的方策として、テーマを設定し校内研究として授業改善に取り組むのか、各教科等で構成したチームを校内に設置するのか、一人ひとりの課題に即して各自が計画的に研鑽を積み重ねるのか、本校にとっての最適な方法について検討する。

<p>【2(1)イ②】 「児童・生徒一人ひとりの学習定着状況の正確な把握と適切な指導・支援」</p>	<p>教職員による自己評価の肯定的回答は、二小で96%、四中で100%だった。ただし、だいたいあてはまると回答した結果は、二小で52%、四中で36.8%だった。</p> <p>各種学力等調査、「はちおうじっ子ミニマム」の令和6年度の結果、令和7年度第1回の結果を踏まえ、必要に応じて設問の意味、解答までのプロセス等を確認、指導し、朝・放課後補習、定期考査前自習教室等を実施し、第2回に臨めるようにした。第2回の結果を踏まえて、満点チャレンジにも取り組ませた。</p>
<p>【2(1)イ③】 「児童・生徒一人ひとりの問題解決的な学習の充実を図るための授業展開・組み立ての工夫・改善」</p>	<p>教職員による自己評価の肯定的回答は、二小で96%、四中で94.4%だった。ただし、だいたいあてはまると回答した結果は、二小で48%、四中で57.9%だった。</p> <p>引き続き、問題解決的な学習の一層の質的な充実を図ることが肝要である。具体的には、単元や本時の目標等を児童・生徒が本時や単元、内容のまとまりを見通して追究・解決する「問題」という問いの形で明示することである。研修のみならず、日常的な教員による学び合いなど、あらゆる機会を通して、また一人ひとりの教師の課題に即して、工夫・改善に取り組めるような環境を整備していく。</p>
<p>【2(1)イ⑤】 「論理的思考力、批判的思考力の向上に向けたプレゼンテーション等表現活動の充実」</p>	<p>教職員による自己評価の肯定的回答は、二小で92%、四中で100%だった。ただし、だいたいあてはまると回答した結果は、二小で56%、四中で73.7%だった。</p> <p>プレゼンテーション等の実施方法等については、極度に緊張してしまう児童・生徒、登校が不安定な児童・生徒等に対する配慮が必要である。そのため、プレゼンテーションを実施する場面等について、配慮、工夫する必要がある。引き続き、教科等の目標、内容を踏まえ、児童・生徒の実態から最適な指導方法を研究することを通して工夫・改善に取り組んでいく。</p>

② 「公正」

【2(2)イ⑥】

「自主的・実践的な集団活動の充実により、主体性や忍耐力の育成、達成感や成就感の感得」

令和6・7年度八王子市教育委員会研究指定校として、特別活動における「学級活動」の指導方法の工夫・改善、「児童会・生徒会活動」の接続、「学校行事」の系統性について研究に取り組み、実践を見直すとともに義務教育9年間を見通した全体計画・年間指導計画を検討する。

<p>【2(2)イ⑥】</p> <p>「自主的・実践的な集団活動の充実により、主体性や忍耐力の育成、達成感や成就感の感得」</p>	<p>研究組織に8部会を設置して研究に取り組んだ、そのうち「児童・生徒会活動部会」が特別活動における実践をリードし、義務教育9年間を見通した指導の工夫・改善、系統性について検討し、その成果を研究発表会にて示した。</p> <p>具体的には、二小児童会、四中生徒会による合同あいさつ運動、合同ユニセフ募金については、四中生徒が第二小学校に参集して実施した。四中生徒会本部により、四中全校生徒が楽しめる全校レクリエーションを企画・運営（学期1回）した。また、四中生徒会役員選挙立会演説会に、二小6年生が参加し、演説を聞いた後に、模擬投票を行った。また、スポーツフェスティバルに向けて、二小・四中に児童・生徒による実行委員会を設置し、オンライン等を活用しながら全校競技等の協議を行った。</p>
---	--

③ 「貢献」

【2(3)イ⑤】

「『地域で・地域とともに・地域を学ぶ』系統性のある郷土学習」

令和6・7年度八王子市教育委員会研究指定校として、総合的な学習の時間を中心に地域教材を活用した実践を通して、内容構成・系統性を見直し、義務教育9年間を見通した全体計画・年間指導計画を再構築する。

<p>【2(3)イ⑤】</p> <p>「『地域で・地域とともに・地域を学ぶ』系統性のある郷土学習」</p>	<p>研究組織に8部会を設置して研究に取り組んだ、そのうち「郷土学習部会」「探究学習部会」が主に総合的な学習の時間における実践をリードし、義務教育9年間を見通した指導の工夫・改善、系統性について検討し、その成果を研究発表会にて示した。</p> <p>具体的には、四中にて募集した生徒ボランティア「郷土コンサルジュ」を立ち上げた。笑顔と学びの体験活動プロジェクト（都）を活用し、八王子車人形の鑑賞・体験を実施した。さらに「郷土コンサルジュ」による企画、二小4年生を招いて共に学ぶ郷土講座を実施した。拓殖大学と連携し、郷土資源を活用した教材開発にも取り組んだ。</p> <p>7月の学校公開では、四中生徒を対象に多賀神社にてお囃子体験、山車体験、多賀神社の歴史等を学ぶ学習を、地域との共催にて実施した。</p> <p>11月の学校公開では、二小校舎にて四中1年生がスタッフとして参加し、二小児童が体験を通して学ぶ学校地域総合防災訓練を、地域、市等との共催にて実施した。</p> <p>それぞれの教材の特色等を踏まえて、内容構成・系統性について検討し、実践を振り返ることを通して改善を図っていく。</p>
---	---

(2) 重点目標と方策

ア 授業改善

重点目標① 授業では「日付、単元・題材名、問題（ねらい・目標）」が明示されている。

※100（授業観察）

学習の定着、学習意欲の向上のための基礎を徹底し、生徒にとって「分かる」「できる」授業を標準化する。

イ 学力の定着

重点目標② 義務教育修了段階において、全生徒が「はちおうじっ子ミニマム」を習得している。

※100（「はちおうじっ子ミニマム」結果）

第1回で誤答だった問題については、誤答の原因を「学力定着プロジェクトチーム」、各学年で分析し、第2回に向けた傾向と対策を講じる。

重点目標③ 「八王子市学力定着度調査」をはじめとする、各種学力・学習状況等の結果に基づき、補習等の取組が行われている。

※90（「八王子市学力定着度調査」結果と補習の取組）

基礎的・基本的な学習内容が身に付いていない生徒を特定し、必要に応じて学年等を遡って補習等を実施する。

ウ 特別支援教育

重点目標④ 全ての教師が「インクルーシブな教育」を理解し、実践している。

※90（学校評価）

障害特性を個性として捉え、交流及び共同学習、副籍交流など、適切な相互理解と専門的な指導により、児童・生徒一人ひとりの学習や活動が適切に設定され、充実が図られている。

エ いじめの防止等

重点目標⑤ いじめを積極的に認知するが、全て解消している。

※90（学校いじめ対策委員会）

法、条例、基本的な方針等の規定に則り、週1回以上の学校いじめ対策委員会、「いじめ対応の時間」を通して学校組織としていじめに対応する。

オ 登校支援

重点目標⑥ 不登校児童・生徒のうち、専門的な相談・指導につながっていない児童・生徒がいない。

※100（年度末調査）

当該生徒の思いや願いを踏まえ、保護者とのコミュニケーションを十分に図った上で、授業のオンライン配信、校内別室、公共施設での支援など、八王子市教育委員会が策定した「つながるプラン」における手立てを講じることで専門的な相談・指導につなげる。

重点目標⑦ 進路希望のある不登校生徒のうち、進路未決定となっている生徒がいない。

※100（年度末調査）

当該児童・生徒の思いや願いを踏まえ、保護者とのコミュニケーションを十分に図った上で、適切に相談・指導する。

カ 学校組織

重点目標⑧ チームとしての学校組織の機能強化が図られている。

※ 90 (学校評価)

校長、副校長の指導の下、校務分掌の遂行、起案・決裁の過程において、OJTの中軸である4級職を中心に、ミドルアップ、ボトムアップで主体的に課題解決できる組織が構築されている。

<p>ア 授業改善 重点目標① 授業では「日付、単元・題材名、問題（ねらい・目標）」が明示されている。</p>	<p>教職員による自己評価の肯定的回答は、二小、四中いずれも100%だった。ただし、だいたいあてはまると回答した結果は、二小で36%、四中で52.6%だった。</p> <p>引き続き、問題解決的な学習の一層の質的な充実を図ることが肝要である。具体的には、単元や本時の目標等を児童・生徒が本時や単元、内容のまとまりを見通して追究・解決する「問題」という問いの形で明示することである。研修のみならず、日常的な教員による学び合いなど、あらゆる機会を通して、また一人ひとりの教師の課題に即して、工夫・改善に取り組めるような環境を整備していく。</p>
<p>イ 学力の定着 重点目標② 義務教育修了段階において、全生徒が「はちおうじっ子ミニマム」を習得している。</p>	<p>義務教育修了段階で全児童・生徒に身に付けさせる社会生活を営む上で必要最低限の知識・技能の習得を確認するための「はちおうじっ子ミニマム」については、二小では、20点満点の17点以上の児童、第2回で第1回よりも得点が向上した児童を合わせた結果、国語で86.3%、算数で92.2%だった。四中では、20点満点の18点以上の生徒、第2回で第1回よりも得点が向上した生徒を合わせた結果、国語で88.7%、算数で95.6%だった。</p>
<p>イ 学力の定着 重点目標③ 「八王子市学力定着度調査」をはじめとする、各種学力・学習状況等の結果に基づき、補習等の取組が行われている。</p>	<p>教職員による自己評価の肯定的回答は、二小で92%、四中で89.4%だった。ただし、だいたいあてはまると回答した結果は、二小で56%、四中で52.6%だった。</p> <p>各種学力等調査、「はちおうじっ子ミニマム」の令和6年度の結果、令和7年度第1回の結果を踏まえ、対象児童・生徒を明確にした上で朝・放課後補習、定期考査前自習教室等を実施した。引き続き、これらの時間を十分に確保すること、効果を高める手立てについて検討する。</p>
<p>ウ 特別支援教育 重点目標④</p>	<p>教職員による自己評価の肯定的回答は、二小で96%、四中で94.7%だった。ただし、だいたいあてはまると回答した結果は、二小で4%、四中で5.3%だった。</p>

<p>全ての教師が「インクルーシブな教育」を理解し、実践している。</p>	<p>具体的には、通常の学級における合理的配慮、児童・生徒一人ひとりの障害特性等に応じた交流及び共同学習については、教員一人ひとりの見解、経験にも差異が見られる。当該児童・生徒の最適な教育環境の整備、社会的自立を第一として充実を図っていかなければならない。</p>
<p>エ いじめの防止等 重点目標⑤ いじめを積極的に認知するが、 全て解消している。</p>	<p>二小のいじめの認知件数は182件であり、うち、126件解消した。この結果について、本校は教職員がいじめ問題に関する基本的認識をもって、未然防止、早期発見、早期対応に適切に取り組んでいると自己評価している。</p> <p>四中のいじめの認知件数は、令和6年度の23件が令和7年度に9件であり、令和6年度の継続7件のうち、6件解消した。この結果について、本校は教職員がいじめに対する感度がより一層高まり、未然防止へ向けた取組が効果的であったと自己評価している。</p>
<p>オ 登校支援 重点目標⑥ 不登校児童・生徒のうち、専門的な相談・指導につながっていない児童・生徒がいない。 重点目標⑦ 進路希望のある不登校生徒のうち、進路未決定となっている生徒がいない。</p>	<p>不登校の傾向を含む児童・生徒のうち、専門的な相談・指導につながっていないケースは0だった。生活指導部、特別支援校内会議、学年・学級等を中心に当該児童・生徒の教育・支援ニーズに基づく最適な環境について、保護者との連携の下、必要に応じて心理や福祉の専門家の助言を踏まえながら粘り強く対応してきた。令和7年度より四中校舎内に開設した校内教育支援センター「多賀」を毎日開室した。はちっこキッチン等の公共施設、仮想空間を利用したVLPを活用する児童・生徒が在籍している。</p> <p>令和7年度四中卒業生の進路未決定者は0である。</p>
<p>カ 学校組織 重点目標⑧ チームとしての学校組織の機能強化が図られている。</p>	<p>教職員による自己評価の肯定的回答は、二小で96%、四中で89.4%だった。ただし、だいたいあてはまると回答した結果は、二小で40%、四中で52.6%だった。</p> <p>令和7年度は、小中一貫校として開校した1年目だったこともあり、その都度起こる課題に対応・解決しながら学校を運営してきたが、実際には改善すべき点は山積している。代表的な課題は、校舎分離型の小中一貫校である点に起因することが挙げられる。具体的には、二小と四中の起案決裁ルート・OJT、各組織の名称を含めた校務分掌の構造化、各分掌の役割分担を整理・統合することである。</p>

これらの課題の解決に向けて、令和9年度の学校組織の構築に向けた協議を進める必要がある。令和8年度は、検討事項を整理した上で、それらの検討事項についての方向性を協議するための組織として、校内に義務教育学校教育課程編成WGを設置する。早期に着手すべき基盤的改善事項としては、二小・四中の各分掌組織の構造を職務内容で整理・統合することである。その上で、起案決裁ルートを明確にし、OJTを関連付けて機能させることである。さらに、教師一人ひとりがもつ強み（個性、特性など）を十分に発揮できるようにするための「働きやすい職場環境整備」と関連付け、これらを一体的かつ円滑に実行するための部署として総務部を設置する。